

# 抄録 模型から見る 歯とからだ

## “模型診断の模型読みの意義”

大阪府歯科技工士会中央南支部 所属 貝原紘一

日常臨床において、フルブリッジやインプラント、総義歯の場合は新たな咬合を与える必要があります。その際にしっかりとした基準点がなければ再現性のない行き当たりばったりの補綴を作ることになります。

考えてみればどんな人でも乳歯時期の歯は殆どと言って良いほど解剖学的正常に萌出しますが、永久歯の時期から歯列に変化が出て歯並びが原因で顎の変形が始まり歯の摩耗や歯牙の喪失と共に顎関節症を発症する人がでてきます。

今回は顎模型を診断して正常な歯列と顎位を計測する方法をお話します。

補綴を作る基準は「咬合平面が正確取れている事」、と「アンテリアガイダンスがキッチリと再現できる事」が最も重要です。

一般に補綴物を作成する場合でも“歯科医師は技工士任せ、技工士は作りっぱなし”でお互いに意思疎通がうまくいなくて困っているのが現状でしょう。

この問題は歯科医師側からも強く感じている事で、外注が基本になってしまった現在の状況に問題があるのです。しかし模型を読み込むことができれば、技工士サイドも上下の顎の位置関係・歯の配列位置を推定することができるため、電話で試適の状態や咬合関係の問題の話をしてもお互いの意思の疎通ができるようになります。そうすることでよりよい歯科医療を提供できると考えています。

技工士教育について、今後は4年生に移行するでしょうが、今後の技工士には、人体解剖の実技、骨学・筋学・神経系・脈管・などの教科を取り入れて頂ければ患者さんの為になるより良い歯科医療を提供出来るのではと考えています。

私のホームページでも紹介していますが、ロックに付いてスポーツマンにも良く有るのですが、今回のオリンピックで活躍した選手の前歯の歯並びの乱配に気がつきましたでしょうか？

中でも上顎の2番が舌側に入り込んで交叉咬合になっている選手これをロックと云っています、詳しくは会場でお話いたします。